

いかにして巨大津波から避難したか? ~ 陸前高田市におけるインタビュー調査からの考察(序報) ~ How to evacuate from huge tsunami. Preliminary report based on eyewitnesses in Rikuzen-Takata

林 能成^{1*}, 水木 千春², 安藤 雅孝³, 石田 瑞穂⁴, 吉岡 祥一⁵
Yoshinari Hayashi^{1*}, Chiharu Mizuki², Masataka Ando³, Mizuho Ishida⁴, Shoichi Yoshioka⁵

¹ 関西大学社会安全学部, ² 北海道大学環境科学院, ³ 中央研究院地球科学研究所, ⁴ 独立行政法人海洋研究開発機構, ⁵ 神戸大学都市安全研究センター

¹ Faculty of Safety Science, Kansai Univ., ² Graduate School of Environmental Science, ³ Institute of Earth Sciences, Academia Si, ⁴ Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology, ⁵ Research Center for Urban Safety and Security

東北地方太平洋沖地震では死者1万4575人、行方不明者1万1324人(警察庁調べ、2011年4月28日現在)という極めて大きな人的被害が発生した。強い揺れは、震度7が宮城県栗原市で観測されたのを筆頭に、震度6強が宮城、福島、茨城、栃木の4県28市で観測されるなど極めて広い範囲に及んでいる。人的被害も北海道から神奈川県まで広がっているが、死者・行方不明者の99.7%以上は宮城、岩手、福島の3県に集中している。これは津波による犠牲者が圧倒的多数を占めているためである。岩手県大槌町、同陸前高田市、宮城県女川町などでは、市町の全人口の1割以上が犠牲になっている。新聞やテレビの報道などで、津波襲来のビデオ映像や、被災者の体験談が伝えられつつあるが、地震時の行動や被害状況、地震が起こる前までにとられていた準備、そして津波が来るまでの避難行動などについては断片的な情報に留まる例が少なくない。本研究では系統的なインタビュー調査により場所と時間を可能な限り明らかにしたうえで、個々の人間の避難実態を明らかにすることを目的とした。

インタビュー調査の手法はインド洋大津波の避難者などでこれまでに進めてきた地震発生からのできごとを順をおって聞いていく手法(例えば、林(2010))を用いた。現地調査は地震発生から1カ月が過ぎた2011年4月20日から23日にかけて岩手県陸前高田市を中心に実施した。体験談の聞き取りは避難所において運営者に趣旨を説明して許可をとった上で行い、避難者の中から話をしてもよいと申し出てくださいました方に対して行った。

回答者の全員が家具が転倒するほどの強い揺れを経験しているが、その後の避難に支障がでるほどの家屋被害が出た方は見られなかった。地震による顕著な家屋被害が近所で見られたという回答者もいなかった。また、ほとんどの回答者は居住地の避難場所についての認識もあり、時間的な差はあるが、その場所への避難行動をとっていた。しかし、その場所は今回の津波においては必ずしも十分な安全性をもっていなかったため、多くの避難者が避難場所で犠牲になってしまっている。今回、体験談をお聞かせいただいた、生き残ることができた人の多くは、津波襲来状況を目撃できたり、あるいは防災無線の放送内容から津波の規模の大きさを想像できた人々であった。

今回の震災の被災者は極めて多く、その一人一人が固有の避難経験をしていると考えられる。そのため、このような聞き取り調査からわかることは極めて限定的な体験にならざるをえない。一方で、一般的な避難行動をモデルに設計された質問紙調査では、その避難実態を知ることは難しい。今後、調査を進めて、避難行動の多様性を明らかにするとともに、その一般性についても考察を深める研究へと発展させる予定である。

キーワード: 津波, 東北地方太平洋沖地震, 避難, 指定避難所, ハザードマップ, 被害想定

Keywords: Tsunami, The 2011 off the Pacific coast of Tohoku Earthquake, evacuation, evacuation point, Hazard map, Damage estimation of tsunami